

## <翻訳資料紹介>信用の普及と庶民銀行(1)

著者	ルッツァティ ルイジ, モルテーニ コッラード, 岡本 義行
雑誌名	社会労働研究
巻	34
号	2
ページ	210-195
発行年	1988-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018437">http://hdl.handle.net/10114/00018437</a>

## 第一部

- (1) *Journal des économistes*, 1862 年 8 月号。
- (2) Say, *Corso completo di economia*, 第 1 部 10 章, Ferrara 訳 p. 109.
- (3) Say, *Trattato d'economia politica*, 2 巻 8 章, p. 283. Ferrara 訳。
- (4) 前掲 Corso より引用。
- (5) Mac Culloch, *I principi di economia politica*. 参照。
- (6) *La magica del credito*.
- (7) Così Trinchera, *Corso d'economia politica*, 1 巻, p. 435 がヴェルツの議論を正確に要約している。
- (8) Richelot, *Une révolution économique politique*, 1863, Lapelle およびフランスの雑誌を参照。
- (9) 信用にかんするマカロックの著作は Pailloulet による翻訳で 1862 年 10 月号, 1863 年 5 月号の経済学雑誌参照。
- (10) イギリスで多く利用されているワラント, すなわち倉荷証券でそれは倉庫を開放する。
- (11) Montucla, *Storia delle matematiche*. および Cossali, *Storia dell'algebra*.
- (12) V. P. & Courcelle-Seneuil, の有名な *Trattato*. の 1 巻 P. 54, ここでは再生産のため貯蓄された生産物にかんする通常の定義を批判している。
- (13) もしフランスがイギリスと同様に現金の使用を縮小でき, 現在流通している 40 億を 20 億フランに減少できたならば, 5 パーセントの利子として年に 1 億フラン節約できる。

\* これはモルテーニ氏との共訳であるが, 翻訳にあたってモルテーニ氏が東京都信用金庫組合から援助を受けた。

\*\* Luigi Luzzatti, *La diffusione del credito e le banche popolari*, 1863, Padova は庶民金融, すなわち信用金庫に理論的基礎を与えた最初の著作と言われている。なお, *Attualità di Luigi Luzzatti*, 1964, a cura di Francesco Parrillo に全文再録されている。

\*\*\* ミラノ・ボッコーニ大学専任講師

すれば十分なのである。一覧払いでも所持人払いでもない手形は明確に一定の人数に限定され一定期日で消滅する。他方、一覧払いで所持人払いの銀行券は気軽に敏速に使用されるため、手形よりも現金の機能や概念に類似している。イギリス人は現金とそれに代わる信用証券を、絶えず流通しているので、それをカレンシーと呼んでいる。この場合には、信用の機能はどのようなものであろうか。それは1スクード（5リラ銀貨）が流通のなかで、たとえば6リラないしそれ以上に対応するように、現金の流通に加えられた蒸気に似ている。そこには貨幣のような不可思議さや複雑さはなく、有益な結果の数々があるに過ぎない。したがって、小額であっても国内の交易を格段に促進する。実際、絶えず流通する100リラは同一の速度で流通しない200リラと等しいと言えるだろうか。船の重要性は単にそのトン数にあるのではなく航行する速度にもよるのであるから、地域内部で考えるとき輸送手段の類に属する現金がこうして生ずるのである。したがって、良好な銀行システムの直接的な効果は限定した現金を利用することにある。現金は非常に速い速度で経済活動が成長するならばその国に留まるが、製造業や貿易を活発にするために輸入した農産物や商品と交換に外国へ出てゆく。

しかし、この場合には信用の影響がいかに素晴らしいかは明らかである。しかも、貨幣との関係の分析のなかで、信用を不思議な力に帰したいと考える人々の誤りがある点まで弁護できる。 (続く)

## 注 序章

- (1) Minghetti, Delle atinenze dell'Economia ecc., p. 55.
- (2) De Maistre ed altri. を参照。
- (3) 特に Coquelin, Courcelle-Seneuil, Thornton, Tooke, Fullerton, Mill & Carey を参照。
- (4) Laur, De la production des métaux précieux en Calipornie. 参照。

つの機械を建設するのは無用である。衣服や食料は豊富に過るとは誰も言わないが、固定資本や道具の節約に励まなければならない。

信用は貨幣数量を二つの方法で減少させるが、マックレオードの新しい教義にたいする反駁を準備するため、それについて簡単に述べておくのがよかろう。イギリスの有名な手形交換所の組織は誰にも知られている。かつて、金融業者が次々に手形を交換したとともに、相互に帳簿上で振り替えることで現金をほとんど支出せずに決済した。現在では、国、ヨーロッパ、世界が巨大な手形交換所、すなわち貸し方借り方の大きな帳簿である。個々の商人のように、それぞれの国民は債権者であるとともに債務者であるから、周知の容易なメカニズムを通して費用のかかる現金を輸送せずに帳簿上で清算する。有価証券や手形はこの目的のためにある。事業の継続的關係のもとで、ミラノやヴェネツィアは取引の最低限にも達しない非常に少ない現金を決済のために送金する。これは金融システムにかんする三段階の歴史的な重要性と関連するので、重要性を理解するためにそれを示す必要がある。第一段階では、貨幣の使用は少なく、交換は物々交換の形態をとった。次いで、大きな進歩として流通を促進する貨幣が導入された。最後に、信用文明のなかで先進国は以前の習慣に戻った。すなわち、初期の金融システムに不可避な問題や障害を発生せずに、大部分の貨幣を節約した。統計によれば、イギリスの支払い総額の10分の9は貨幣や銀行券を利用せずになされた。もし信用メカニズムがこのように完全に形成されていなかったならば、巨額の貨幣が必要であったと考えられる<sup>(13)</sup>。直接的な清算を通して現金の使用が節約され、手形や銀行券を振り出すならば、今度は同一金額の債務を持つこととなる。もし手形が存在しなかったならば、まったく同一の金額を二回輸送する必要があったろうが、手形が存在する場合には振り出し人は債務者に手形を渡すことができ、期日までに決済すればよい。その手形が100リラであれば、100リラの現金のように10回人手を回りうるとしても、手形の期日までに100リラだけの現金が存在

退蔵された大量の現金の役割を果たす。この分析をさらに進めるためには、貨幣の経済的意義を検討する必要がある。貨幣は交換を容易にする商品であるとともに、共通の単位として他の商品と比較する安定した価値尺度であり、取引関係にあるすべての商品に対置される。したがって、貨幣の機能と重要性は財の流れとの生き生きとした協力から由来するのである。ある国の金融システムの理想は最少の貨幣で最大の取引を実現することであろう。実際、貨幣は生命がそれに依存している動脈や静脈に、そして消費者の手元に役立つ商品をもたらす流通経路に例えることができる。その経路が十分であるところに、さらにもうひとつの経路を建設するならば無駄な浪費となるだろう。その土地を耕作して農産物を増産できる。かくて貨幣は発生する。

貨幣は他の全ての商品と同様に価値をもつ商品である。あらゆる誤謬は貨幣の定義から生まれる。貨幣を通常の商品以上のものとして考える傾向があるが、逆に実体的な価値をもたない想像上の存在にすぎない。したがって、役立つがゆえに社会が喜んでこの商品に支払いをするならば、交換や流通に被害を与えない範囲でその数量を縮小しなければならない。実際、貨幣が商品であり生産物であるという考え方が真実であるならば、セーの有名な命題によって、生産物は生産物と交換され、現金を得たい人はその金額に等しい他の商品を販売しなければならない。資本是一群の経済学者にしたがえば固定資本と流動資本に分類されるが、他の学派によれば道具と原材料とに分類される。こうした議論は私の意図と無関係なので、混乱した命名法の藪のなかに入りこむのを避けることとしよう。貨幣は素晴らしい現象ではあるが目に見えない展開のなかで、その性質を継続的に経済原理として実現させている。この法則は人間の欲求を最少の原料と道具で満足させ、最大量の生産物を獲得するよう導くのである。

道具（ないしは固定）資本は機械装置を表しており、パン焼き窯、アークライトの織機などである。たった一つで十分な機能を満たすときに、二

この事実注意到を喚起したが、必ずしも適切な結果を引き出したわけではない。客観的な事実が示しているように、信用によってその国の生産は増加するだろうし、信用を利用しなければ取るに足らない富を得るにすぎないだろう。しかし、ここで〈信用は資本を生み出す〉という諺の誤りに注意しておくことが必要である。というのは、現在存在する財に新たな資産を追加するという意味にとられかねないからである。しかし、信用は潜在的な生産力を実現させることで、資本による有益な結果を産み出すに過ぎないのである。

信用の役割は一国に流通する通貨との関連で重要である。信用のメカニズムのなかで銀行がもっとも活動的な組織である。多くの貨幣を集め継続的に貸し付ける貯蓄銀行のように銀行も行動することは言うまでもない。こうした大規模組織が形成されると、現金を持つ人はそのかなりの部分を預金する。そこでは、時間の損失と多大な困難と費やして相手を見出さねばならないよりも、はるかに容易に貨幣の不足している側が貨幣を借入できるだろう。銀行は都合の良い接点の機能を果たす大規模な代理店に例えることができる。供給からの刺激で資本への需要が促進されるとともに、需要の機会によって遊休資本が活動しはじめる。かくて、経済学者が信用の理論や機能を研究するずっと以前に、誰も身近に現金を所有しないとしても、完成した形態で繁栄する銀行に貨幣が集積するということとなる。したがって、利子を約束することで引き寄せられた最少額が一緒にまとめられ、別々ではまったく役立たないがまとまり大企業の成長に貢献するのである。さらに、現金を安全に保管でき好きな時に利子とともに払い戻しできるとすれば、偶然的な要請に対応するため金庫のなかに現金を保管する人はいない。こうして、銀行が通貨を継続的な経済活動に還流させるという認識がされはじめた。一瞬たりとも貨幣が遊休することなくその役割を増加させ、貨幣量も増大した。今日では、十人の力強い単純労働者が二人の鈍重な職人よりも成果をあげるように、流通しつつある小額の貨幣は

移転という行為は、所有者が細心の注意をはらって耕作することを望まないか、耕作の方法を知らないか、耕作できないことを示しているからである。貸借の行為は移転が憂慮すべき占有の争いをひきおこすよりも、手ごろな果実をもたらすことを示している。所有者が直接それを活用するよりも、貸与された資本が一国の生産力の増加に貢献することはありうる。実際、勤勉に他人の資本を活用する人は最も実り豊かな成果をもたらすとともに、潜在的な力を実現するように努める。というのは、彼は所有者に利息を支払わねばならないうえに、自身のためにそれ相応の利益を得なければならないからである。一方、自分の資本を活用する人は勤勉でないかもしれない。要するに、前者は必要性が最大限の資本の増殖を導くが、後者の場合には労働に熱中させる理由は利潤の誘惑しかない。ここでは、資本の多義性の議論に深入りせずに<sup>(12)</sup>、二つの存在様式に対応する二つの観点から、富について検討するのが適當である。富のあるものは利用されぬままにあり、財の増加に役立っていない、すなわち実りをもたらさないのである。逆に、企業において継続的に使用されている富は一国の生産力に力強い息吹をふきこんでいる。多くの有用な財の生産に利用されているため無駄な富の浪費はない。豪華な教会に蓄積された財宝が生産活動に使用されたならば、どれほど多くの国で今日の巨額の負債が存在しなかったであろう。信用は活用されずに放置されている財を活用するとともに、未利用の富を活動的な資本の状態に変換することができる。このような意味で、多少危険な言い回しではあるが、信用は資本を生み出す。あるいは休眠している富を呼び覚まし、継続的な誘因によって増殖を刺激する有益な操作なのである。

次の分析に進もう。掛け売りする商人は掛け売りしない場合に比べ多量の商品を販売するだろう。生産者が顧客に信用販売しないならば生産水準を落とさねばならない。また、販売の減少が生産を低下させる理由は明らかである。どのようにして遊休資本が存在しなくなるかを示して、セーは

得のなかで正しく評価されるべきである……と述べている。換言すれば、マックレオードは経済学のカルダーノであることを望んだのである。

## 第二章

ヴェルツやマックレオードが強く主張したように信用に資本を生み出す不思議な力を帰することなく、セーが主張した以上に信頼を信用の源泉とみなさねばならぬように思われる。この難しい問題を忍耐強く検討してみよう。信用の本来の概念は信頼であり、経済学のなかで最も心理的な部分である。借金をしたときには担保や抵当によってあるいは保証人によって返済を保証しなければならない。第一に、〈保証は庶民よりも王が優る〉と古いローマの諺で言われていた。第二に、リスクは主観的には債務者の誠実さに、客観的には義務を履行せねばならない時点における財産に依存するであろう。大量の手形の流通が示すように、今や一国の商取引の大部分は個人的信用に立脚している。したがって、信用の発展にとって名誉と誠実は必要条件であり、借金の限度は国民のモラルや教育水準にしたがい拡大ないしは縮小する。

しかし、現実の世界では、気候、土地柄、人々の適性は多様である。普遍性は例外であるから、素質、徳、時には偶然に依存して運不運がつきまとうのは人間にとって不可避である。かくて、資本を持つが活用しない人と資本を持たない人が活用を情熱的に探し求める人との間の分業を信用は促進する。巨額の富の所有者がそれを活用する意志や適性を欠いたことや、非常に多くの富がまじめに利用されなかったとが幾度となくあった。自然の要求によって、資本と労働との結びつきが至高の調和を示すのである。また、貧困と富裕との美事な調和にしたがい、社会の進歩を促進するのである。それでは一体信用とは何であろうか。信用は人間社会に不可避な不平等を緩和し、利用されないままにある財を好運な移転により増殖させるのである。土地の自由な流通が望まれている。というのは、一般に土地の



返済が実行されない場合には、約束は価値を失い財産の損失も生ずる。あらゆる将来の支払いはその時点での価値をもち、その価値に達するまで信用の創造が競争によりなされる。したがって、将来の収益と支払い総額は信用という非物質的財産のなかの最大のものである。かくてロー (Law) とフランス会議の誤謬を避けることができる。ひとつの例がこのイギリス人経済学者の理論を明らかにするであろう。ある銀行家は客から 100 リラ預かり、それにたいして 100 リラの手形を振り出す。銀行家にとっては、 $100 - 100 = 0$  であるから、彼の財産は以前と何ら変わるところはない。ところが、マックレオードによると、今銀行家は自由にできる 100 リラの現金を持ち、客もまた自分の事業に使用できる 100 リラの手形を所有している。したがって、一つではなく二つの交換できる資産が流通しているのである。それゆえ「ある国の通貨を評価する際は、金銀の貨幣に信用証券の総額を付加すべきである。イギリスで流通している手形は土地や英国債と同様に価値を持っている……」。ともあれ、マックレオードの理論展開をこれ以上考察する必要はない。彼の主張を上記のように要約するとともに、その重要性和理論の革新性を損なわないよう彼自身の言葉を引用した。彼はエウレロ (Eulero) とピーコック (Peacock) の幾何学の方法を利用し、豊富な数字を用い、彼のアイディアの源泉がデモステーネ (Demostene) にまでさかのぼることを確認し、自己満足しながらカルダーノ (Cardano) までも引用している。それは信用が単に資本の移動をもたらす作用ではなくて、むしろ信用証券の形態で流通する独立した財産であることを示すためである。負の根、すなわち方程式における未知数の値が、カルダーノ以前の数学者により役立たないとして注目されないか無視されていた<sup>(11)</sup>。

カルダーノはそれを正確に分析して、その意味を説明しようとした。同様にマックレオードは経済学に応用した記号の意味を発見したとしてそれを誇った。すなわち、信用により生じた債務は実質的価値をもち、国民所

過去	現在	未来
+	0	—
土地や住宅，事務所		無期限の年金
発行された本		著作権
既存の機械		特許
職業から得られた収入		顧客，暖簾
会社の資本　など		株　など

さて、この分類に基づき、彼れは商業における貸し付けの性格を考察する。それはコンモダチウムではなくして貸借の形をとる。たとえば、友人に本を貸す場合には同一の本が返却されるべきであるが、取引上では貸した現金は完全に借りた人の所有するところとなり、その代わりに借り受けた人は遅かれ早かれある時期に同額…ところが同一の現金ではない…を返却することを要求される義務を負う。すなわち、どのような取引上の貸し付けも、債務という新しい財産がそれから創造される一種の売買である。そこでは、債務とは契約当事者同志の同意で生じた義務であり、それが価値をもち商業取引の対象となるという約束である。したがって、マイナスの記号は経済学において時間の象徴であり、正確には次のように定式化される。A氏は現金100リラの他に、B氏に50リラの未来（－）の支払いを求める現在（＋）の権利を所有している。

「ある人の財産を評価するためには負債を控除すべきであるという主張は、経済学にかんして言えば、現状を評価する方法としてあまり適切ではなかろう。義務は同額の財産を相殺するにもかかわらず、実は財産と義務とは別個の物であるということを忘れるべきではない。そして両者は上記の法則にしたがい、実際の富を構成しながら取引され流通しうる」。

ところが、このような非常に曖昧な理論に制約をおくため、マックレオードは「信用は将来の支払いをともなう現在の権利である」と主張する。

はその金額の所有者となり、いつでも現金あるいは他の財に交換または交換できる信用証券を顧客にたいして振り出す」。

「さて、倉荷証券は特別な物品にたいする所有権であるが、銀行券はなんら具体的な物品をも表していないのである。倉荷証券は表示している物品の金額を越えないが、たとえばイギリスでは信用証券は貨幣の10倍以上発行されている。実は、ほとんどすべての恐慌の原因は信用証券からなる特殊な所有権の乱発にある。倉荷証券の過剰を恐慌の原因として認める者は誰一人としていない」。このように、マックレオードは論証の前提について述べた後、次のように続けている。「これまで信用は単なる資本の移動として考えられたが、私はそれを一種の財産の名称であることを明らかにする。ソーントン (Thornton) によると、もしある人の財産に信用が付加される場合、その信用にたいする同額の第三者にたいする負債の存在を意味するので、結局社会の財産総額は変化しないという。たとえば、もし A 氏は 100 リラの金および 3 か月後の支払い期日で B 氏を支払い人とする 50 リラの手形を持つならば、そして B 氏も 100 リラをもつとすると、A 氏の財産は  $100 + 50$  リラであり B 氏の資産は  $100 - 50$  リラである。ゆえに、50 リラから 50 リラを差し引くと、結果は 0 であるとソーントンは主張している。

ところが、マックレオードの理論にはマイナスの数量は存在せずに、それはマイナスを表さず単なる対立を意味する。もしプラスの記号で過去に蓄積した生産物を表すと、マイナスの記号で未来の生産物を表さねばならないであろう。過去の生産物とともに、店の暖簾や上等な顧客などは財産であり、自立的にそして別個的に流通しうる財産でもある。もしプラスの記号で過去の生産物を表し、現在を 0 で、そしてマイナスの記号で未来の生産物を表すと、次のように分類できる。

(Bonald) は、信用をも全面的に攻撃した。ともあれ、一方ではセイ、リカード、マカロックは、信用の重要さを軽視し、その分析を深めていないが、他方ではボナルドはそれを基盤から崩壊させようとしている。

ところが、1821年にナポリで、ヴェルツは信用を“積極的”と“消極的”な二面に区分した有名な著作を公刊した<sup>(6)</sup>。前者は弁済能力の評価に基づき、後者は世間の評判に基づき貸し付けを受け易くなるということにある。既存の自己の富に、時間の経過につれて実現する富を加える技術を積極的信用と定義した。彼の考え方によれば、こうして以前には存在しなかった収益が生み出される。課された取り決めにたいして正直で、知性をもって、勤勉に励めば、通貨の量を100倍にするとともに、貨幣によっては生じえない結果も得られるという<sup>(7)</sup>。

さて、フランス人により既に「経済学における革命」と大げさに呼ばれたマックレオードの理論の説明に移ろう<sup>(8)</sup>。

マックレオードは論証のために幾何学の補助定理に相当する若干の基本的な原理をまず明確にする。「富の経済的要素はその価値が測定され、そして交換性や購売力をもつ物資であるということにある。別個に交換できる物資は、それぞれが財産であり富の一部分を構成している。所有とは物質的な現象ではなくひとつの権利である。そこで、所有あるいは権利は既に存在している物にたいする権利と、いまだ存在していないが、早晚生まれるはずの物にたいする権利とに分けることができる」<sup>(9)</sup>。

「価値とは等価とみなされる富の二要素間の交換関係である。その二要素は耐久財ないしは非耐久財、物質的ないしは非物質的、現在財ないしは将来財、一般的ないしは特殊な性格をもっているよい」。

「信用とはある非物質的な所有物に与えられる名称である。それは倉荷証券と信用証券を区別すれば明らかになる」。

「倉荷証券<sup>(10)</sup>は倉庫にある物品を表し、その物品を離れては証券は価値を持たない。ところが、手形の代わりに現金を銀行に預ける時、銀行家

次のように答えた。「資本を持たない人が、信用を利用して、自分で運用できないか運用を望まない人の資本を手にする。すなわち、資本の遊休を防ぐのである。たとえば、もしある織物生産者が商人に掛け売りで織物を販売しないならば、商品在庫が工場に積み上がってしまう。商人にたいして信用を与えることは、その織物がより早く消費者の手に到達することを意味する」<sup>(2)</sup>。「多くの人は信用が資本を時には2倍に増やすと述べたが、こうした誤解の原因は資本の性格と機能についての無知に基づくのである。資本はかならず実物的な価値であり、物質に固定された価値である。なぜならば、非物質的な生産物は蓄積できないからである。また、ある時点でひとつの物的な生産物は同時に二つの場所には存在しえないし、ある時点で二人の人間が同時に利用することはできない」<sup>(3)</sup>。この著名な経済学者はさらに次のことを付け加えている。「社会にとって信用の普及は望ましいことではあるが、さらに望ましい状態は誰もが信用に依存せず、借金をしないで自分の仕事に必要な資本を十分に蓄積できる状態である。これが最良の状態であると言うことができる。というのは、借金や支払い延期の要求はいつも不快をともなうからである。信用は、一方で企業家に生産費増加の犠牲を迫り、他方で資本家を損失の危機にさらすとともに支払い利子を増加させる。可能ならば自己資本によって生産したほうが望ましい」<sup>(4)</sup>。1819年にリカードは上院の委員会で「生産者が商人から相当の注文を受けた時に、通常、そうした条件を生み出す信用が彼自身の資本の広範な利用を可能とする」かどうかについて諮問された際、次のように答えた。「信用がいかなる方法で、商品生産に貢献するかは不明であるが、……信用はある時点に存在する資本を機能させるために、ある地点から他の地点へと移動させる手段である。信用は資本を生み出しはしない。資本を有効に利用する者にとってのみ重要である」<sup>(5)</sup>。

マカロックは著名な研究者の言葉をそのまま繰り返し、信用の役割に二次的な重要性しか与えていない。近代社会の原理を批判してきたボナルド

き、こうした問はつまらないものに見える。しかし、彼らをカリフォルニアの貧しい鉱脈での労働に例えることができる。彼らは豊かでもない鉱山で働かされているが、多大な労力と勤勉さをもって成果を上げている。というのは、近年鉱山は枯渇しつつあるが、僅少であっても尽きせぬ報酬を約束しているからである<sup>(4)</sup>。

自分自身の新しい教義を述べるつもりはない。ただ、今だにまったく明らかにされていないか、一般に無視されている近年の事実についての研究から、若干の有益な結果と改革を導くことができたかと願っている。

## 第一部

### 第一章

信用の機能については二つの見解が存在する。経済学者のなかには信用を軽視し、その影響力を限定する人がいる。他方、信用にたいして全能の力を信じ、資本を産み出す能力さえも認めている経済学者もいる。セー(Say)、リカード(Ricardo)、マカロック(Mac Culloch)は前者に属する代表的な経済学者である。ヴェルツ(Welz)、コックリン(Coquelin)は後者に属する経済学者である。近年、後者に属するマックレオード(Mac Leod)が整合的で厳密な理論を構成したことにより、後者が脚光を浴び始めた。実際、フランスの大学でセーの理論を発展させたシェヴァリエ(M. Shevalier)自身、このイギリスの経済学者について次のように述べている。「マックレオードは権威のある論敵よりも説得力があり、理路整然としている」<sup>(1)</sup>。回り道をせずに、その重要性和機能に注意しながら、信用の普及の問題を考察したい。また、国民にとって信用はどこまで有益であるか、そしてどのような場合に問題となるかを明らかにしなければならない。「信用はいかなる利益をもたらすか」という問にたいしてセーは

抑圧のくびきは甘受すべきであると、彼らは偽善のため息をつきながら教え諭すのである。

上記の二つの誤りの中で、どちらが有害であるかは私にはわからないが、少なくとも前者の場合にたいしては、ある程度の寛大さを否定する事はできない。しかし、後者は進歩を拒否し、希望を砕き、人間を永久に暗い世界に閉じ込めるのである。逆に、科学は素晴らしい使者であり、重大な課題を担っている。科学は次の事柄を論証しなければならない。すなわち、第一には「心」と事実との間に深い溝は存在しないこと。第一には「兄弟の縁」の原則、すなわちプロレタリアートと労働者階級との苦悩に対する我々の憐れみが経済学の結論と矛盾しないこと。第三には、その問題は難しいが解決策は確かに存在すること。そして最後に、自由と進歩への信念は思想家の出発点と到着点でなければならないということである。最近では誰もが、今世紀を特徴づける上記の崇高なる分析を通じて直観や心情の中に真実の存在することを証明しなければならない。強烈な跳躍への願望は、しばしば我々に素晴らしい未来を提供する。そして、この約束のゆえに、我々は現在の悲惨な状態を耐え忍ぶのである。

かつてギリシャ人が秘密の神託の意味を聖職者に尋ねたように、今日不安な大衆はこうした熱望にたいする神秘的な意味を求めている。科学は明確で、穏健で、率直な答えをもって信頼に答えねばならず、これこそが大いなる問題の真髄である。

さて、信用は経済学の問題の中で、社会における倫理的な進歩と最も関連している。このテーマは権威ある経済学者によって既に研究されてきたので、ここでは広範囲に述べるつもりはない<sup>(3)</sup>。信用の機能について若干の説明をした後、最近現われてきた新しい形態、すなわち小規模企業やそれとは自覚しない労働者階級の間に普及しうる形態について、この10年間の事実を優れた学者の理論に基づき検討しようと考えている。

一国における労働者階級の重要性や彼らへの真の使者を問題にしないと

のイギリス革命及び1789年のフランス革命は、研究者にたいしてさまざまな問題を提起し、多くの事実を教えたのではないだろうか。社会科学の基盤が変化したといえる。

同様に経済学も二つの差し迫った危険に脅かされている。もし情熱の騒々しい声にだけ耳を傾け、科学的な忍耐強い詳細な分析よりも感情による直観的混乱にしたがうとき、経済学は社会主義へと導く危険な下り坂にあるといえる。しかし、もしも厳格な形式を過度に重視すれば、人間は思うように変形できる融通無碍な素材ではないこと、及び現実の世界では数学的な厳密さで導かれた結論に時として従わないことが忘れられてしまう。人間は必ずしも数学の法則に支配されないのだ。1848年のフランスにおける歴史的イベントはいまだ記憶にはっきりと残るとともに、痛恨の経験として全世界に教訓を与えている。2月24日以降、革命は政治的側面より社会的側面に転化したように思われる。盲目的情熱に溢れた少数だが優秀な指導者は社会を触み暗くしている諸悪を意識し、多くの不運で傷ついた良心の叫びをもって改革、労働の権利、そして彼らがそれを最後の奴隷制と呼んだ賃労働の廃止を大胆に予言した。そして彼らは労働者階級に反乱を呼びかけながら、聖人ヨハネのように先駆者として新しいキリスト（救世主）を歓迎する。他方、こうした誤った諸説にたいしては、科学は真実そのもので武装した。科学をしばしば軽蔑してきた人々も科学の援助を請い求めている。ところが、活発な討論がゆき過ぎ、双方が頑迷に自説を主張して、ついには革新家の野心に満ちた狂信が自由な議論による平和的な状況からパリの広場での戦闘へと転換させてしまった。したがって、上記の事実の意味を良く知る者は激しい心の痛みを感じるだろう。現世では苦悩が永久になくならないとしても、我々の人間性が認められるようにないしは少なくとも苦悩を緩和するよう努めるべきであると自戒する必要がある。人々に天国を約束する社会主義は虚言であるが、不動の学派による学説も同じように虚言である<sup>(2)</sup>。問題の総和を減らすことはできない、あるいは



# 信用の普及と庶民銀行\* (1)\*\*

ルイジ・ルッツァティ 著  
コッラード・モルテーニ\*\*\*・岡本義行 訳

## 序説

社会科学は経験から現実の本質や形式を抽象する。研究者が考えもしなかったようなさまざまな非常に有益で新しい制度が、理論的に明らかにされる以前に、突然姿を現すことがある。伝統的な学派は、学問としての承認を求める革新的な動向や実り多い経験を、単なるユートピアとしてしばしば非難する。言うまでもなく、それが承認されるまでには厳密な論証が必要である。というのは、人類の苦悩を和らげようとする熱意が強くなればなるほど、誤りを犯す可能性も同時に大きくなるからである。しかし、科学にはドグマはあってはならない。また科学は不十分さと欠陥が検証されなり限り、理論や事実を排除すべきでない。社会科学の場合には、革新にたいしての警戒心は数学や自然科学の分野よりも顕著である。なぜならば、後者の分野では宇宙の客観的な事実を考察するので、我々の情熱をかきたてることもないし、政治的な偏見と個人的な利害とも衝突しないからである。したがって、ユークリッドの理論が人間の財産に関係していたならば、人々の一致した同意は得られなかったか、あるいは長期間の対立は避けられなかったであろうという主張は正しい<sup>(1)</sup>。ともあれ、日々生活の様式は急激に変化し、広いと見えた科学の領域も突然狭められることもある。また継続的に進化しつつある現実の情け容赦ない論理や厳しく駆りたてる新たな欲求が、正統な教義として受け入れられてきた学説の修正の必要性を示し、新しい制度の輪郭をも描き出すのである。実際に、1688年